

令和 7 年度

第 4 9 回高校数学教育を考える会 (沖縄県高等学校数学教育会・琉球大学)

目次

令和 7 年度	琉球大学入試試験問題についての感想と質問 (高数教 大学入試問題検討委員会)	
前期日程	甲	1 1
前期日程	乙	1 2
後期日程		1 3
令和 7 年度	琉球大学入試問題 解答例 (高数教 大学入試問題検討委員会)	
前期日程	甲	1 4 ~ 2 0
前期日程	乙	2 1 ~ 2 2
後期日程		2 3 ~ 2 7

令和 7 年度（2025）琉球大学入試問題（前期・甲）に関する質問事項

問題	範囲	分野	難易度	質問事項
1 問 1 問 2 問 3 問 4	数Ⅲ 数Ⅲ 数Ⅲ 数Ⅲ	微分法 微分法 微分法 微分法	易 標準 難 難	・ 数学的帰納法の方針を立てられていたか。また、論述はできていたか。
2 問 1 問 2 問 3	数Ⅲ 数Ⅲ 数Ⅲ	積分法 積分法 微分法	標準 標準 難	・ 問 3 の最後、最小値の項をまとめる計算ができていたか。
3 問 1 問 2 問 3	数 C 数 C 数 C	空間ベクトル 空間ベクトル 空間ベクトル	標準 やや難 難	・ 計算量が多い印象だが、最後まで解き切れていたか。 ・ 問 3 「空間における 2 直線が交わる条件」を理解できていたか。
4 問 1 問 2 問 3	数 A 数 A 数 A	確率 確率 確率	易 標準 標準	・ 1 ～ 3 と比較して易しい印象だが、正答率は高かったか。
全体 証明を論述する力や、複雑な計算をやり切る計算力が必要な内容だった。 特に正答率の高い問題や低い問題はあったか。				

（注：易・標準・難は教科書レベルにおいて）

令和7年度(2025)琉球大学入試問題(前期・乙)に関する質問事項

問題	範囲	分野	難易度	質 問 事 項
1 問1 問2 問3	数Ⅰ 数Ⅰ 数Ⅱ	数と式 数と式 複素数と方程式	標準 易 標準	・問1 $1/37 + 32/22$ を表す循環小数をどのように求めているか。 ・問2 $21!$ の素因数分解をどのように求めているか。
2 問1 問2	数Ⅱ 数Ⅱ	微分法 微分法	標準 標準	・問1「3次関数の導関数は2次関数なので、異なる a, b で $f'(a)=f'(b)=0$ であればその前後で $f'(x)$ の符号が変わるのは自明であり、増減表による十分性の確認は不要」という意見があるが、どのような基準で採点したか。
全体 ・例年に比べ易しい印象があるが、正答率は高かったか。				

(注：易・標準・難は教科書レベルにおいて)

令和 7 年度（2025）琉球大学入試問題（後期）に関する質問事項

問題	範囲	分野	難易度	質問事項
1 問 1 問 2	数Ⅲ 数Ⅲ	微分法 微分法	標準 標準	・ 標準的な微分法の問題であったが、正答率は高かったか。
2 問 1 問 2 問 3	数Ⅱ 数Ⅱ 数Ⅲ	三角関数 三角関数 積分法	標準 やや難 難	・ 三角関数の対称性 $\sin(3\pi/5)=\sin(2\pi/5)$ は理解できていたか。
3 問 1 問 2 問 3	数 B 数 B 数 B	数列 数列 数列	易 難 標準	・ 余りの性質は新課程で取り扱われる機会が少なくなっているが、生徒はどれくらいできていたか。 ・ 問 2 の証明の論述はできていたか。
4 問 1 問 2 問 3	数 A 数 A 数 B	確率 確率 数列	易 標準 標準	・ 標準的な確率漸化式の問題で比較的易しいと感じたが、正答率は高かったか。
全体 今後も整数分野（余りの性質や不定方程式など）の出題はあるか。				

（注：易・標準・難は教科書レベルにおいて）

1 n を自然数, $f_n(x) = 1 + \sum_{k=1}^n \frac{x^k}{k!}$ とする。次の問いに答えよ。(50点)

問1 $f_2(x)$ の導関数を求めよ。

問2 $x \geq 0$ のとき, $e^x \geq f_1(x)$ を示せ。

問3 $x \geq 0$ のとき, すべての自然数 $n \geq 1$ に対して不等式 $e^x \geq f_n(x)$ を示せ。

問4 $0 \leq x \leq 1$ のとき, すべての自然数 $n \geq 1$ に対して不等式 $e^x \leq f_n(x) + \frac{x^n}{n!}$ を示せ。

(解説)

問1 $f_2(x) = 1 + \sum_{k=1}^2 \frac{x^k}{k!} = 1 + \frac{x}{1!} + \frac{x^2}{2!} = 1 + x + \frac{x^2}{2}$ より, $f_2'(x) = 1 + x$

問2 $g_1(x) = e^x - f_1(x)$ とおく。

$$g_1'(x) = e^x - (1 + x) \text{ より, } g_1'(x) = e^x - 1$$

$$x > 0 \text{ のとき } e^x > 1 \text{ だから, } g_1'(x) > 0$$

よって, $x \geq 0$ において $g_1(x)$ は単調に増加する。

また $g_1(0) = e^0 - 1 = 0$ より, $x \geq 0$ のとき $g_1(x) \geq 0$ すなわち $e^x \geq f_1(x)$ となる。

問3 $g_n(x) = e^x - f_n(x)$ ($x \geq 0$) において, すべての自然数 n に対して $g_n(x) \geq 0$ となることを数学的帰納法により示す。

[1] $n=1$ のときは, 問2により示されている。

[2] ある自然数 l に対して, $g_l(x) \geq 0$ であると仮定する。

$$\text{ここで, } f'_{l+1}(x) = \left\{ 1 + x + \frac{x^2}{2} + \cdots + \frac{x^{l+1}}{(l+1)!} \right\}' = 1 + x + \cdots + \frac{x^l}{l!} = f_l(x)$$

であることに注意すると,

$$g_{l+1}'(x) = \{e^x - f_{l+1}(x)\}' = e^x - f_l(x) = g_l(x)$$

仮定により $g_l(x) \geq 0$ だから, $g_{l+1}'(x) \geq 0$

よって $x \geq 0$ において $g_{l+1}(x)$ は単調に増加する。

また $g_{l+1}(0) = e^0 - f_{l+1}(0) = 1 - 1 = 0$ より, $x \geq 0$ のとき $g_{l+1}(x) \geq 0$

[1], [2] により, すべての自然数 n に対して $g_n(x) \geq 0$ すなわち $e^x \geq f_n(x)$ となる。

問4 $h_n(x) = \left\{ f_n(x) + \frac{x^n}{n!} \right\} - e^x$ ($0 \leq x \leq 1$) において, すべての自然数 n に対して $h_n(x) \geq 0$ となる

ことを数学的帰納法により示す。

[1] $n=1$ のとき

$$h_1(x) = \left\{ f_1(x) + \frac{x^1}{1!} \right\} - e^x = 1 + 2x - e^x$$

$$h_1'(x) = 2 - e^x$$

$0 < x < 1$ で $h_1'(x) = 0$ とすると, $e^x = 2$ より $x = \log 2$

よって $h_1(x)$ の増減表は右のようになり、
 $h_1(1)=3-e>0$ から、 $h_1(x)$ は $x=0$ で
 最小値0をとる。
 よって $h_1(x)\geq 0$

x	0	...	$\log 2$	...	1
$h_1'(x)$		+	0	-	
$h_1(x)$	0	↗	極大	↘	$3-e$

[2] ある自然数 l に対して、 $h_l(x)\geq 0$ であると仮定する。

$$h_{l+1}'(x) = \left[\left\{ f_{n+1}(x) + \frac{x^{l+1}}{(l+1)} \right\} - e^x \right]' = f_l'(x) + \frac{x^l}{l!} - e^x = h_l(x)$$

仮定により $h_l(x)\geq 0$ だから、 $h_{l+1}'(x)\geq 0$

よって $x\geq 0$ において $h_{l+1}(x)$ は単調に増加する。

また $h_{l+1}(0)=f_{l+1}(0)+0-e^0=1-1=0$ より、 $x\geq 0$ において $h_{l+1}(x)\geq 0$

[1], [2] により、すべての自然数 n に対して $h_n(x)\geq 0$ すなわち $e^x \leq f_n(x) + \frac{x^n}{n!}$ となる。

参考

問4の不等式は $e^x - \frac{x^n}{n!} \leq f_n(x)$ と変形できるから、問3の不等式と合わせて

$$0 \leq x \leq 1 \text{ のとき } e^x - \frac{x^n}{n!} \leq f_n(x) \leq e^x$$

が成り立つ。ここで、 $0 \leq x \leq 1$ のとき $0 \leq \frac{x^n}{n!} \leq \frac{1}{n!}$ であり、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} = 0$ から $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x^n}{n!} = 0$

よって $\lim_{n \rightarrow \infty} \left(e^x - \frac{x^n}{n!} \right) = e^x$ だから、はさみうちの原理により

$$0 \leq x \leq 1 \text{ のとき } \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = e^x$$

すなわち $e^x = 1 + x + \frac{x^2}{2} + \cdots + \frac{x^n}{n!} + \cdots \quad \cdots (*)$

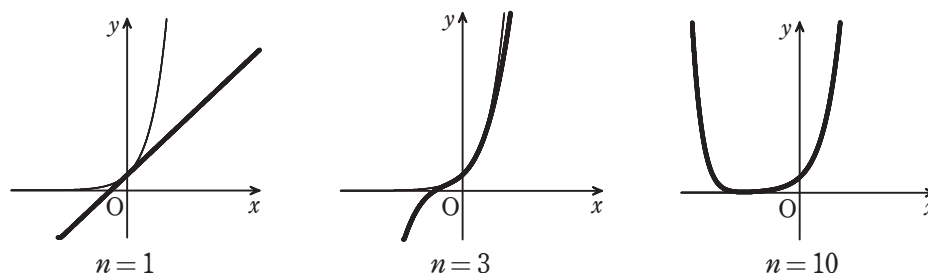
が成り立つ。

発展

マクローリン展開により、任意の実数 x に対し、 e^x は次のように表せる。

$$e^x = 1 + x + \frac{x^2}{2!} + \cdots + \frac{x^{n-1}}{(n-1)!} + R_n, \quad R_n = \frac{x^n}{n!} e^{\theta x} \quad (0 < \theta < 1)$$

ここで $\lim_{n \rightarrow \infty} R_n = 0$ (※ 証明は下記) だから、等式(*)は $0 \leq x \leq 1$ だけでなく、すべての実数 x に対して成り立つ。



※ $\lim_{n \rightarrow \infty} R_n = 0$ の証明

$x=0$ のときは明らかなので、 $x \neq 0$ の場合を考える。

$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x^n}{n!} = 0$ が言えればよい。 $m = [2|x|] + 1$ ($[\]$ はガウス記号) とおくと

$$\begin{aligned}
 n > m \text{ のとき } \left| \frac{x^n}{n!} \right| &= \left| \frac{x^{n-m}}{n(n-1)(n-2) \cdots (m+1)} \cdot \frac{x^m}{m!} \right| \\
 &= \frac{|x|^{n-m}}{n(n-1)(n-2) \cdots (m+1)} \cdot \left| \frac{x^m}{m!} \right| \\
 &\leq \underbrace{\frac{|x|^{n-m}}{m \cdot m \cdot \cdots \cdot m}}_{(n-m)\text{個}} \cdot \left| \frac{x^m}{m!} \right| \\
 &= \left(\frac{|x|}{m} \right)^{n-m} \cdot \left| \frac{x^m}{m!} \right| \\
 &\leq \left(\frac{|x|}{2|x|} \right)^{n-m} \left| \frac{x^m}{m!} \right| \quad (\because m = [2|x|] + 1 \geq 2|x| > 0) \\
 &= \left(\frac{1}{2} \right)^{n-m} \left| \frac{x^m}{m!} \right|
 \end{aligned}$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{1}{2} \right)^{n-m} \left| \frac{x^m}{m!} \right| = 0 \text{ だから } \lim_{n \rightarrow \infty} \left| \frac{x^n}{n!} \right| = 0 \quad \text{よって } \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x^n}{n!} = 0$$

2 $a > 0$ として, $g(a) = \int_a^{a+1} (x - \log x) dx$ とする。次の問いに答えよ。(50点)

問1 不定積分 $\int \log x dx$ を求めよ。

問2 $g(a)$ を求めよ。

問3 $g(a)$ の最小値とそのときの a の値を求めよ。

解説

$$\begin{aligned} \text{問1} \quad \int \log x dx &= \int (x)' \log x dx \\ &= x \log x - \int x (\log x)' dx \\ &= x \log x - \int x \cdot \frac{1}{x} dx \\ &= x \log x - x + C \quad \text{ただし, } C \text{ は積分定数} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{問2} \quad g(a) &= \left[\frac{x^2}{2} - (x \log x - x) \right]_a^{a+1} \\ &= \left\{ \frac{(a+1)^2}{2} - \frac{a^2}{2} \right\} - \{ (a+1) \log(a+1) - a \log a \} + \{ (a+1) - a \} \\ &= a + \frac{3}{2} - (a+1) \log(a+1) + a \log a \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{問3} \quad g'(a) &= 1 - \left\{ 1 \cdot \log(a+1) + (a+1) \cdot \frac{1}{a+1} \right\} + \left(1 \cdot \log a + a \cdot \frac{1}{a} \right) \\ &= 1 - \log(a+1) - 1 + \log a + 1 \\ &= 1 - \log \left(1 + \frac{1}{a} \right) \end{aligned}$$

$$a > 0 \text{ で } g'(a) = 0 \text{ とおくと, } \log \left(1 + \frac{1}{a} \right) = 1 \text{ より } 1 + \frac{1}{a} = e$$

$$\text{すなわち } a = \frac{1}{e-1}$$

よって, $a > 0$ における $g(a)$ の増減表は右のように

なるから, $g(a)$ は $a = \frac{1}{e-1}$ で最小となる。

a	0	...	$\frac{1}{e-1}$	...
$g'(a)$		-	0	+
$g(a)$		↘	極小	↗

$$\text{また, } g(a) = a + \frac{3}{2} - a \log(a+1) - \log(a+1) + a \log a$$

$$= \frac{3}{2} - \log(a+1) - a \left\{ 1 - \log \left(1 + \frac{1}{a} \right) \right\}$$

$$= \frac{3}{2} - \log(a+1) - a g'(a)$$

であり, $g' \left(\frac{1}{e-1} \right) = 0$ だから

$$g \left(\frac{1}{e-1} \right) = \frac{3}{2} - \log \left(\frac{1}{e-1} + 1 \right) = \frac{3}{2} - \log \frac{e}{e-1} = \frac{3}{2} - \{ 1 - \log(e-1) \} = \frac{1}{2} + \log(e-1)$$

以上により, $g(a)$ は $a = \frac{1}{e-1}$ で最小値 $\frac{1}{2} + \log(e-1)$ をとる。

- 3 四面体 OABC の辺の長さを $OA=3$, $OB=\sqrt{5}$, $OC=\sqrt{6}$, $AB=2\sqrt{2}$ とする。 $\overrightarrow{OA}=\vec{a}$, $\overrightarrow{OB}=\vec{b}$, $\overrightarrow{OC}=\vec{c}$ として, $\vec{a}\cdot\vec{c}=3$, $\vec{b}\cdot\vec{c}=3$ とする。次の問いに答えよ。(50点)

問1 $\vec{a}$ と $\vec{b}$ の内積 $\vec{a}\cdot\vec{b}$ を求めよ。

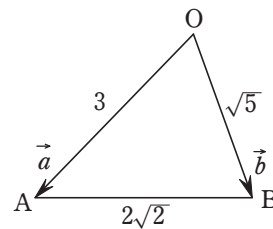
問2 点 O から平面 ABC に垂線を下ろしその交点を H とする。このとき, $\overrightarrow{OH}$ を $\vec{a}$, $\vec{b}$, $\vec{c}$ を用いて表せ。

問3 点 A から平面 OBC に垂線を下ろしその交点を K とする。このとき, 直線 OH と直線 AK は交わることを示せ。また, その交点を M とするとき, $\overrightarrow{OM}$ を $\vec{a}$, $\vec{b}$, $\vec{c}$ を用いて表せ。

解説

問1 $|\vec{b}-\vec{a}|^2=|\vec{b}|^2-2\vec{a}\cdot\vec{b}+|\vec{a}|^2$ より

$$\begin{aligned}\vec{a}\cdot\vec{b} &= \frac{1}{2}(|\vec{b}|^2+|\vec{a}|^2-|\vec{b}-\vec{a}|^2) \\ &= \frac{1}{2}(OB^2+OA^2-AB^2) \\ &= \frac{1}{2}\{(\sqrt{5})^2+3^2-(2\sqrt{2})^2\}=\frac{6}{2}=3\end{aligned}$$

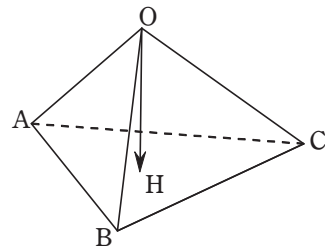


別解 $\triangle OAB$ で余弦定理により $\cos \angle AOB = \frac{3^2 + (\sqrt{5})^2 - (2\sqrt{2})^2}{2 \cdot 3 \cdot \sqrt{5}} = \frac{6}{6\sqrt{5}} = \frac{1}{\sqrt{5}}$

$$\text{したがって } \vec{a}\cdot\vec{b}=|\vec{a}||\vec{b}|\cos \angle AOB=3\cdot\sqrt{5}\cdot\frac{1}{\sqrt{5}}=3$$

問2 H は平面ABC 上にあるから, 実数 s , t を用いて $\overrightarrow{AH}=s\overrightarrow{AB}+t\overrightarrow{AC}$ と表せる。

$$\begin{aligned}\text{よって } \overrightarrow{OH} &= \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AH} \\ &= \overrightarrow{OA} + s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC} \\ &= \vec{a} + s(\vec{b}-\vec{a}) + t(\vec{c}-\vec{a}) \\ &= (1-s-t)\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c}\end{aligned}$$



$$\overrightarrow{OH} \perp \overrightarrow{AB} \text{ より } \overrightarrow{OH} \cdot \overrightarrow{AB} = 0 \text{ だから } \{(1-s-t)\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c}\} \cdot (\vec{b}-\vec{a}) = 0$$

$$(1-s-t)\vec{a}\cdot\vec{b} - (1-s-t)|\vec{a}|^2 + s|\vec{b}|^2 - s\vec{a}\cdot\vec{b} + t\vec{b}\cdot\vec{c} - t\vec{a}\cdot\vec{c} = 0$$

$$(1-s-t) \cdot 3 - (1-s-t) \cdot 3^2 + s(\sqrt{5})^2 - s \cdot 3 + t \cdot 3 - t \cdot 3 = 0$$

$$\text{整理すると } 4s + 3t = 3 \cdots \textcircled{1}$$

$$\overrightarrow{OH} \perp \overrightarrow{AC} \text{ より } \overrightarrow{OH} \cdot \overrightarrow{AC} = 0 \text{ だから } \{(1-s-t)\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c}\} \cdot (\vec{c}-\vec{a}) = 0$$

$$(1-s-t)\vec{a}\cdot\vec{c} - (1-s-t)|\vec{a}|^2 + s\vec{b}\cdot\vec{c} - s\vec{a}\cdot\vec{b} + t|\vec{c}|^2 - t\vec{a}\cdot\vec{c} = 0$$

$$(1-s-t) \cdot 3 - (1-s-t) \cdot 3^2 + s \cdot 3 - s \cdot 3 + t(\sqrt{6})^2 - t \cdot 3 = 0$$

$$\text{整理すると } 2s + 3t = 2 \cdots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ を解くと } s = \frac{1}{2}, \quad t = \frac{1}{3}$$

$$\text{よって } \overrightarrow{OH} = \left(1 - \frac{1}{2} - \frac{1}{3}\right)\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c} \quad \text{すなわち} \quad \overrightarrow{OH} = \frac{1}{6}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c}$$

問3 点Kは平面OBC上にあるから、実数 u 、 v を用いて $\overrightarrow{OK} = u\overrightarrow{OB} + v\overrightarrow{OC}$ と表せる。

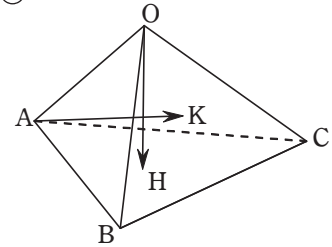
$$\text{よって } \overrightarrow{AK} = \overrightarrow{AO} + \overrightarrow{OK} = -\overrightarrow{OA} + u\overrightarrow{OB} + v\overrightarrow{OC} = -\vec{a} + u\vec{b} + v\vec{c}$$

$$\begin{aligned} \overrightarrow{AK} \perp \overrightarrow{OB} \text{ より } \overrightarrow{AK} \cdot \overrightarrow{OB} &= 0 \text{ だから, } (-\vec{a} + u\vec{b} + v\vec{c}) \cdot \vec{b} = 0 \\ &-\vec{a} \cdot \vec{b} + u|\vec{b}|^2 + v\vec{b} \cdot \vec{c} = 0 \\ &-3 + u(\sqrt{5})^2 + v \cdot 3 = 0 \\ &5u + 3v = 3 \cdots \textcircled{3} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \overrightarrow{AK} \perp \overrightarrow{OC} \text{ より } \overrightarrow{AK} \cdot \overrightarrow{OC} &= 0 \text{ だから, } (-\vec{a} + u\vec{b} + v\vec{c}) \cdot \vec{c} = 0 \\ &-\vec{a} \cdot \vec{c} + u\vec{b} \cdot \vec{c} + v|\vec{c}|^2 = 0 \\ &-3 + u \cdot 3 + v(\sqrt{6})^2 = 0 \\ &3u + 6v = 3 \cdots \textcircled{4} \end{aligned}$$

$$\textcircled{3}, \textcircled{4} \text{ を解いて } u = \frac{3}{7}, \quad v = \frac{2}{7}$$

$$\text{よって } \overrightarrow{AK} = -\vec{a} + \frac{3}{7}\vec{b} + \frac{2}{7}\vec{c}$$



直線OH上の点をP, 直線AK上の点をQとすると、実数 k 、 l を用いて

$$\overrightarrow{OP} = k\overrightarrow{OH}, \quad \overrightarrow{OQ} = \overrightarrow{OA} + l\overrightarrow{AK}$$

と表せる。すなわち

$$\overrightarrow{OP} = k\left(\frac{1}{6}\vec{a} + \frac{1}{2}\vec{b} + \frac{1}{3}\vec{c}\right) = \frac{k}{6}\vec{a} + \frac{k}{2}\vec{b} + \frac{k}{3}\vec{c}$$

$$\overrightarrow{OQ} = \vec{a} + l\left(-\vec{a} + \frac{3}{7}\vec{b} + \frac{2}{7}\vec{c}\right) = (1-l)\vec{a} + \frac{3}{7}l\vec{b} + \frac{2}{7}l\vec{c}$$

$\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OQ}$ が成り立つような実数 k 、 l が存在すれば、2直線OH、AKは交わるといえる。

4点O、A、B、Cは同じ平面上にないから、 $\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OQ}$ となるのは

$$\begin{cases} \frac{k}{6} = 1-l \\ \frac{k}{2} = \frac{3}{7}l \\ \frac{k}{3} = \frac{2}{7}l \end{cases}$$

が成り立つことと同値である。

この連立方程式はただ1組の解 $k = \frac{3}{4}$ 、 $l = \frac{7}{8}$ をもつ。

よって2直線OH、AKはただ1点で交わる。その交点Mについては

$$\overrightarrow{OM} = \frac{3}{4}\overrightarrow{OH} \text{ より } \overrightarrow{OM} = \frac{1}{8}\vec{a} + \frac{3}{8}\vec{b} + \frac{1}{4}\vec{c}$$

- 4 赤玉3個と白玉3個が入っている袋がある。まず3枚のコインを投げ、表が k 枚出たとき、この袋に赤玉を k^2 個追加し、次のその袋から玉を2個同時に取り出すという試行を行う。例えば、コイン投げで表が2枚、裏が1枚出たときは、赤玉4個を追加して、赤玉7個と白玉3個が入っている袋から玉を2個同時に取り出す。コイン投げで3枚とも裏が出たときは、赤玉の追加はなく、赤玉3個と白玉3個が入っている袋から玉を2個同時に取り出す。次の問いに答えよ。(50点)

- 問1 コイン投げで3枚とも表でありかつ袋から取り出した玉が2個とも赤玉である確率を求めよ。
 問2 袋から取り出した玉が2個とも赤玉である確率を求めよ。
 問3 袋から取り出した玉が2個とも赤玉であったとき、コイン投げで3枚とも表であったという条件付き確率を求めよ。

解説

- 問1 コイン投げで3枚とも表である確率は $\left(\frac{1}{2}\right)^3$

このとき袋には $3^2=9$ 個の赤玉は追加され、赤玉12個、白玉3個となる。

ここから赤玉2個を取り出す確率は $\frac{{}_{12}C_2}{{}_{15}C_2}$

よって、求める確率は $\left(\frac{1}{2}\right)^3 \times \frac{{}_{12}C_2}{{}_{15}C_2} = \frac{1}{8} \times \frac{12 \cdot 11}{2 \cdot 1} \times \frac{2 \cdot 1}{15 \cdot 14} = \frac{11}{140}$

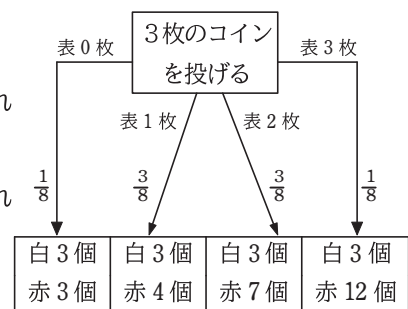
- 問2 コイン投げで出る表の枚数は0枚、1枚、2枚、3枚のいずれかである。それぞれの事象を順に X_0, X_1, X_2, X_3 とする。このとき、袋の中の様子は

X_0 が起こった場合 赤玉3個、白玉3個のまま

X_1 が起こった場合 袋には $1^2=1$ 個の赤玉が追加され
赤玉4個、白玉3個

X_2 が起こった場合 袋には $2^2=4$ 個の赤玉が追加され
赤玉7個、白玉3個

X_3 については問1で既に求めている。



また、袋から取り出した玉が2個とも赤玉である事象を Y とすると

$$P(X_0 \cap Y) = P(X_0) \times P_{X_0}(Y) = \left(\frac{1}{2}\right)^3 \times \frac{{}_3C_2}{{}_6C_2} = \frac{1}{40}$$

$$P(X_1 \cap Y) = P(X_1) \times P_{X_1}(Y) = {}_3C_1 \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2}\right)^2 \times \frac{{}_4C_2}{{}_7C_2} = \frac{3}{28}$$

$$P(X_2 \cap Y) = P(X_2) \times P_{X_2}(Y) = {}_3C_2 \left(\frac{1}{2}\right)^2 \frac{1}{2} \times \frac{{}_7C_2}{{}_{10}C_2} = \frac{7}{40}$$

$$\text{問1より } P(X_3 \cap Y) = \frac{11}{140}$$

よって、求める確率は

$$\begin{aligned} P(Y) &= P(X_0 \cap Y) + P(X_1 \cap Y) + P(X_2 \cap Y) + P(X_3 \cap Y) \\ &= \frac{1}{40} + \frac{3}{28} + \frac{7}{40} + \frac{11}{140} = \frac{7+30+49+22}{280} = \frac{108}{280} = \frac{27}{70} \end{aligned}$$

- 問3 求める条件付き確率は $P_Y(X_3) = \frac{P(X_3 \cap Y)}{P(Y)} = \frac{11}{140} \times \frac{70}{27} = \frac{11}{54}$

1 次の問いに答えよ。(50点)

問1 $\frac{1}{37}$ を小数で表したとき、小数第100位の数字を求めよ。また $\frac{1}{37} + \frac{32}{33}$ を小数で表したとき、小数第100位の数字を求めよ。

問2 21の階乗21!を素因数分解せよ。

問3 多項式 $P(x)$ を x^2-1 で割ったときの余りが $2x$ 、 x^2-x-6 で割ったときの余りが $3x+2$ である。このとき、 $P(x)$ を x^2-4x+3 で割ったときの余りを求めよ。

解説

問1 $\frac{1}{37}=0.\dot{0}2\dot{7}$ より、 $\frac{1}{37}$ は0, 2, 7の3個の数が循環する循環小数で表される。

100を3で割った余りは1だから、小数第100位の数は循環節の1番目である0

また、 $\frac{32}{33}=0.\dot{9}6$ だから、右のように計算して $\frac{1}{37}=0.027027027027\dots$

$$\begin{array}{r} \frac{1}{37} + \frac{32}{33} = 0.\dot{9}672\dot{3} \\ +) \frac{32}{33} = 0.9696969696\dots \\ \hline 0.996723996723\dots \end{array}$$

よって $\frac{1}{37} + \frac{32}{33}$ は9, 9, 6, 7, 2, 3の6個の数が循環する循環小数で表される。

100を6で割った余りは4だから、小数第100位の数は循環節の4番目である7

別解 $\frac{1}{37} + \frac{32}{33} = \frac{27027}{999999} + \frac{969696}{999999} = \frac{996723}{999999} = 0.\dot{9}9672\dot{3}$ としても求められる。

問2 $21! = 21 \times 20 \times 19 \times 18 \times 17 \times 16 \times 15 \times 14 \times 13 \times 12 \times 11 \times 10 \times 9 \times 8 \times 7 \times 6 \times 5 \times 4 \times 3 \times 2 \times 1$
 $= 3 \cdot 7 \times 2^2 \cdot 5 \times 19 \times 2 \cdot 3^2 \times 17 \times 2^4 \times 3 \cdot 5 \times 2 \cdot 7 \times 13 \times 2^2 \cdot 3 \times 11 \times 3^2 \times 2^3 \times 7 \times 2 \cdot 3 \times 5 \times 2^2 \times 3 \times 2$
 $= 2^{18} \cdot 3^9 \cdot 5^4 \cdot 7^3 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 17 \cdot 19$

別解 $21 \div 2 = 10 \dots 1$, $21 \div 4 = 5 \dots 1$, $21 \div 8 = 2 \dots 5$, $21 \div 16 = 1 \dots 5$

となるから、21!は2で最大 $10+5+2+1=18$ 回割れる。

$$21 \div 3 = 7 \quad , \quad 21 \div 9 = 2 \dots 3$$

となるから、21!は3で最大 $7+2=9$ 回割れる。

$$21 \div 5 = 4 \dots 1 \quad \text{となるから、21!は5で最大4回割れる。}$$

$$21 \div 7 = 3 \quad \text{となるから、21!は7で最大3回割れる。}$$

$$11, 13, 17, 19 \text{ はそれぞれ最大で1回しか割れないため、} 21! = 2^{18} \cdot 3^9 \cdot 5^4 \cdot 7^3 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 17 \cdot 19$$

問3 $P(x)$ を x^2-1 で割ったときの商を $Q_1(x)$ 、 x^2-x-6 で割ったときの商を $Q_2(x)$ とおくと

$$P(x) = (x^2-1)Q_1(x) + 2x = (x+1)(x-1)Q_1(x) + 2x \dots \textcircled{1}$$

$$P(x) = (x^2-x-6)Q_2(x) + 3x+2 = (x+2)(x-3)Q_2(x) + 3x+2 \dots \textcircled{2}$$

また、 $P(x)$ を x^2-4x+3 で割ったときの商を $Q(x)$ 、余りを $ax+b$ とおくと

$$P(x) = (x^2-4x+3)Q(x) + ax+b = (x-1)(x-3)Q(x) + ax+b \dots \textcircled{3}$$

③で $x=1$ として $P(1)=a+b$, $x=3$ として $P(3)=3a+b$

また、①で $x=1$ として $P(1)=2 \cdot 1=2$

②で $x=3$ として $P(3)=3 \cdot 3+2=11$

$$\text{よって } \begin{cases} a+b=2 \\ 3a+b=11 \end{cases} \text{ これを解くと } a=\frac{9}{2}, b=-\frac{5}{2}$$

よって、求める余りは $\frac{9}{2}x - \frac{5}{2}$

2 関数 $f(x)=x^3+ax^2+bx+c$ を考える。次の問いに答えよ。(50点)

問1 $f(x)$ が $x=1$ と $x=2$ で極値をとるとき、 a と b の値を求めよ。

問2 a と b を問1で求めた値とする。さらに曲線 $y=f(x)$ が直線 $y=6x-2$ に接するとき、 c の値を求めよ。

(解説)

問1 $f'(x)=3x^2+2ax+b$

$f(x)$ が $x=1$ と $x=2$ で極値をとるとき、 $f'(1)=f'(2)=0$ が成り立つから

$$\begin{cases} 3+2a+b=0 \\ 12+4a+b=0 \end{cases}$$

これを解くと $a=-\frac{9}{2}$, $b=6$

このとき、 $f'(x)=3x^2-9x+6=3(x^2-3x+2)=3(x-1)(x-2)$

となり、右の増減表から $f(x)$ は $x=1$ と $x=2$ で極値をとる。

以上により、 $a=-\frac{9}{2}$, $b=6$

	...	1	...	2	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗	極大	↘	極小	↗

問2 問1の結果により $f(x)=x^3-\frac{9}{2}x^2+6x+c$

$g(x)=6x-2$ とする。曲線 $y=f(x)$ と直線 $y=g(x)$ が接するとき、接点の x 座標を t とすると

$$f(t)=g(t) \cdots \textcircled{1}, \quad f'(t)=g'(t) \cdots \textcircled{2}$$

が成り立つ。

$$\textcircled{1} \text{より} \quad t^3 - \frac{9}{2}t^2 + 6t + c = 6t - 2 \cdots \textcircled{3}$$

$$\textcircled{2} \text{より} \quad 3t^2 - 9t + 6 = 6$$

$$3t^2 - 9t = 0$$

$$3t(t-3)=0$$

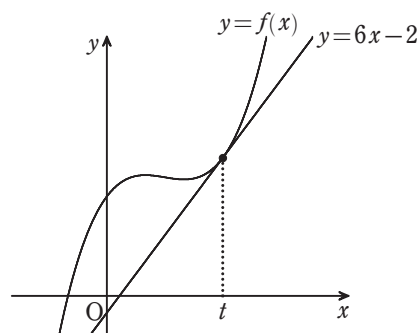
$$t=0, 3$$

$$t=0 \text{ のとき } \textcircled{3} \text{より} \quad c=-2$$

$$t=3 \text{ のとき } \textcircled{3} \text{より} \quad 27 - \frac{81}{2} + 18 + c = 18 - 2$$

$$c = \frac{23}{2}$$

以上により、求める c の値は $c=-2, \frac{23}{2}$



- 1 関数 $f(x)$ は、 $\int_0^x f(t)dt = \frac{x^2}{2} - \cos x + \sin x + 1$ を満たすとする。ただし $0 < x < 2\pi$ とする。次の

問いに答えよ。(50点)

問1 $f(x)$ の極値を求めよ。

問2 曲線 $y=f(x)$ の変曲点を求めよ。

(解説)

問1 与えられた等式の両辺を微分して $f(x) = x + \sin x + \cos x$

$$\text{よって } f'(x) = 1 + \cos x - \sin x = 1 - \sqrt{2} \sin\left(x - \frac{\pi}{4}\right)$$

$$f'(x) = 0 \text{ とすると } \sin\left(x - \frac{\pi}{4}\right) = \frac{1}{\sqrt{2}}$$

$$0 < x < 2\pi \text{ より } -\frac{\pi}{4} < x - \frac{\pi}{4} < \frac{7}{4}\pi \text{ だから } x - \frac{\pi}{4} = \frac{\pi}{4}, \frac{3}{4}\pi$$

$$\text{すなわち } x = \frac{\pi}{2}, \pi$$

よって、 $f(x)$ の増減表は右のようになるから、 $f(x)$ は

$$x = \frac{\pi}{2} \text{ で極大値 } \frac{\pi}{2} + 1$$

$$x = \pi \text{ で極小値 } \pi - 1$$

をとる。

x	0	...	$\frac{\pi}{2}$	...	π	...	2π
$f'(x)$		+	0	-	0	+	
$f(x)$		↗	$\frac{\pi}{2} + 1$	↘	$\pi - 1$	↗	

問2 $f''(x) = -\sin x - \cos x = -\sqrt{2} \sin\left(x + \frac{\pi}{4}\right)$

$$f''(x) = 0 \text{ とすると } \sin\left(x + \frac{\pi}{4}\right) = 0$$

$$\frac{\pi}{4} < x + \frac{\pi}{4} < \frac{9}{4}\pi \text{ より } x + \frac{\pi}{4} = \pi, 2\pi$$

$$\text{すなわち } x = \frac{3}{4}\pi, \frac{7}{4}\pi$$

よって、 $f''(x)$ の符号と $f(x)$ の凹凸は右の表のようになるから、
曲線 $y=f(x)$ の変曲点は

$$\left(\frac{3}{4}\pi, \frac{3}{4}\pi\right), \left(\frac{7}{4}\pi, \frac{7}{4}\pi\right)$$

x	0	...	$\frac{3}{4}\pi$	...	$\frac{7}{4}\pi$	...	2π
$f''(x)$		-	0	+	0	-	
$f(x)$		上に凸	$\frac{3}{4}\pi$	下に凸	$\frac{7}{4}\pi$	上に凸	

2 次の問いに答えよ。(50点)

問1 $\sin 3\theta$ を $\sin \theta$ を用いて表せ。

問2 等式 $\sin \frac{3\pi}{5} = \sin \frac{2\pi}{5}$ を利用して, $\cos \frac{\pi}{5}$ の値を求めよ。

問3 $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ において, 曲線 $y = \sin 2x$, $y = \sin 3x$, 直線 $x = \frac{\pi}{2}$ で囲まれる部分の面積を求めよ。

(解説)

$$\begin{aligned} \text{問1 } \sin 3\theta &= \sin(\theta + 2\theta) \\ &= \sin \theta \cos 2\theta + \cos \theta \sin 2\theta \\ &= \sin \theta (1 - 2\sin^2 \theta) + \cos \theta \cdot 2\sin \theta \cos \theta \\ &= \sin \theta (1 - 2\sin^2 \theta) + 2\sin \theta \cos^2 \theta \\ &= \sin \theta (1 - 2\sin^2 \theta) + 2\sin \theta (1 - \sin^2 \theta) \\ &= 3\sin \theta - 4\sin^3 \theta \end{aligned}$$

$$\text{問2 } \text{問1の結果により } \sin \frac{3\pi}{5} = 3\sin \frac{\pi}{5} - 4\sin^3 \frac{\pi}{5}$$

$$\text{また, } \sin \frac{2\pi}{5} = 2\sin \frac{\pi}{5} \cos \frac{\pi}{5}$$

$$\text{よって, } \sin \frac{3\pi}{5} = \sin \frac{2\pi}{5} \text{ より}$$

$$3\sin \frac{\pi}{5} - 4\sin^3 \frac{\pi}{5} = 2\sin \frac{\pi}{5} \cos \frac{\pi}{5}$$

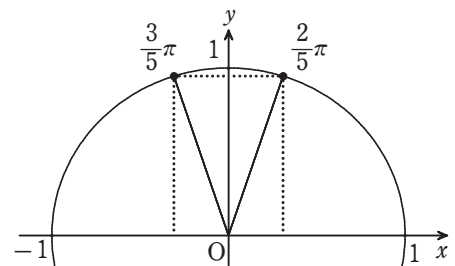
$$\sin \frac{\pi}{5} > 0 \text{ であるから, 両辺を } \sin \frac{\pi}{5} \text{ で割って}$$

$$3 - 4\sin^2 \frac{\pi}{5} = 2\cos \frac{\pi}{5}$$

$$3 - 4\left(1 - \cos^2 \frac{\pi}{5}\right) = 2\cos \frac{\pi}{5}$$

$$4\cos^2 \frac{\pi}{5} - 2\cos \frac{\pi}{5} - 1 = 0$$

$$0 < \cos \frac{\pi}{5} < 1 \text{ より, } \cos \frac{\pi}{5} = \frac{1 + \sqrt{5}}{4}$$



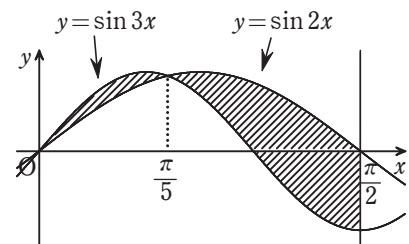
$$\begin{aligned} \sin \frac{3\pi}{5} &= \sin\left(\pi - \frac{2\pi}{5}\right) = \sin \frac{2\pi}{5} \\ \cos \frac{3\pi}{5} &= \cos\left(\pi - \frac{2\pi}{5}\right) = -\cos \frac{2\pi}{5} \end{aligned}$$

問3 $y = \sin 2x$, $y = \sin 3x$ のグラフは右の図のようになり,

$$\sin \frac{3\pi}{5} = \sin \frac{2\pi}{5} \text{ より, 2つのグラフの } 0 < x < \frac{\pi}{2} \text{ に}$$

おける交点の x 座標は $\frac{\pi}{5}$ である。

よって, 求める面積を S とおくと



$$S = \int_0^{\frac{\pi}{5}} (\sin 3x - \sin 2x) dx + \int_{\frac{\pi}{5}}^{\frac{\pi}{2}} (\sin 2x - \sin 3x) dx$$

$$= \left[-\frac{\cos 3x}{3} + \frac{\cos 2x}{2} \right]_0^{\frac{\pi}{5}} + \left[-\frac{\cos 2x}{2} + \frac{\cos 3x}{3} \right]_{\frac{\pi}{5}}^{\frac{\pi}{2}}$$

$$= -\frac{1}{3} \left(\cos \frac{3}{5} \pi - 1 \right) + \frac{1}{2} \left(\cos \frac{2}{5} \pi - 1 \right) - \frac{1}{2} \left(-1 - \cos \frac{2}{5} \pi \right) + \frac{1}{3} \left(0 - \cos \frac{3}{5} \pi \right)$$

$$= \frac{1}{3} - \frac{2}{3} \cos \frac{3}{5} \pi + \cos \frac{2}{5} \pi$$

ここで, $\cos \frac{3}{5} \pi = \cos \left(\pi - \frac{2}{5} \pi \right) = -\cos \frac{2}{5} \pi$ であるから

$$S = \frac{1}{3} - \frac{2}{3} \left(-\cos \frac{2}{5} \pi \right) + \cos \frac{2}{5} \pi = \frac{1}{3} + \frac{5}{3} \cos \frac{2}{5} \pi$$

$$\cos \frac{2}{5} \pi = 2 \cos^2 \frac{\pi}{5} - 1 = 2 \left(\frac{\sqrt{5} + 1}{4} \right)^2 - 1 = \frac{\sqrt{5} - 1}{4} \text{ であるから}$$

$$S = \frac{1}{3} + \frac{5}{3} \cdot \frac{\sqrt{5} - 1}{4} = \frac{5\sqrt{5} - 1}{12}$$

- 3 数列 $\{a_n\}$ を, 条件 $a_1=2$, $a_2=1$, $a_{n+2}=a_{n+1}+a_n$ ($n=1, 2, 3, \dots$) によって定める. 次の問いに答えよ. (50点)

問1 $a_3, a_4, a_5, a_6, a_7, a_8$ を5で割った余りを求めよ.

問2 すべての $n \geq 1$ に対して, a_n を5で割った余りと a_{n+k} を5で割った余りが等しくなるような最小の自然数 k を求めよ.

問3 a_{2025} を5で割った余りを求めよ.

(解説)

問1 $a_3 = a_2 + a_1 = 1 + 2 = 3$ $a_4 = a_3 + a_2 = 3 + 1 = 4$
 $a_5 = a_4 + a_3 = 4 + 3 = 7$ $a_6 = a_5 + a_4 = 7 + 4 = 11$
 $a_7 = a_6 + a_5 = 11 + 7 = 18$ $a_8 = a_7 + a_6 = 18 + 11 = 29$
より, これらを5で割った余りは順に3, 4, 2, 1, 3, 4

問2 問1の結果では, a_n を5で割った余りは2, 1, 3, 4の4個の数が繰り返し現れているので,

$$k \geq 4$$

一般に, $a_{n+4} = a_n$ が成り立つことが予想される. これを数学的帰納法により示す.

以下, 5を法とする合同式で考える.

[1] 問1より $a_5 \equiv a_1$, $a_6 \equiv a_2$ だから, $n=1, 2$ のとき予想は成り立つ.

[2] ある自然数 l に対して $n=l, l+1$ のとき予想が成り立つ, すなわち

$$a_{l+4} \equiv a_l, \quad a_{(l+1)+4} \equiv a_{l+1} \text{ が成り立つと仮定する.}$$

$$\text{このとき, } a_{l+6} \equiv a_{l+5} + a_{l+4}$$

$$\equiv a_{l+1} + a_l$$

$$\equiv a_{l+2}$$

よって $a_{(l+2)+4} \equiv a_{l+2}$ だから $n=l+2$ のときも予想は成り立つ.

[1], [2] より, すべての n に対して $a_{n+4} = a_n$ が成り立つから, 求める k の値は $k=4$

(別解) 一般に $a_{4n-3}, a_{4n-2}, a_{4n-1}, a_{4n}$ を5で割った余りが順に2, 1, 3, 4となることを数学的帰納法により示す.

[1] $n=1$ のとき 問1より成り立つ.

[2] ある自然数 l に対して $a_{4l-3} \equiv 2, a_{4l-2} \equiv 1, a_{4l-1} \equiv 3, a_{4l} \equiv 4$ と仮定すると

$$a_{4(l+1)-3} \equiv a_{4l+1} \equiv a_{4l} + a_{4l-1} \equiv 4 + 3 \equiv 7 \equiv 2$$

$$a_{4(l+1)-2} \equiv a_{4l+2} \equiv a_{4l+1} + a_{4l} \equiv 2 + 4 \equiv 6 \equiv 1$$

$$a_{4(l+1)-1} \equiv a_{4l+3} \equiv a_{4l+2} + a_{4l+1} \equiv 1 + 2 \equiv 3$$

$$a_{4(l+1)} \equiv a_{4l+4} \equiv a_{4l+3} + a_{4l+2} \equiv 3 + 1 \equiv 4$$

よって, $n=l+1$ のときも予想は成り立つ.

[1], [2] よりすべての n に対して予想が成り立つから, 求める k の値は $k=4$

問3 $2025 = 4 \cdot 506 + 1$ より $a_{2025} \equiv a_1 \equiv 2 \pmod{5}$

よって, 求める余りは2

- 4 数直線上の4点1, 2, 3, 4を動く点Pが1の位置にある。サイコロを投げて, 1, 2, 3, 4の目が出たらその目が表す数字の位置に移動し, 5, 6の目が出たら移動はせず, 現在の位置にとどまる。例えば, 1回目に3の目, 2回目に5の目が出たとき, その2回の試行の後, 点Pは3の位置にある。この試行を繰り返し, n 回目の試行の後に, 点Pが1の位置にある確率を p_n とする。次の問いに答えよ。(50点)

問1 p_1 および p_2 を求めよ。

問2 p_{n+1} を p_n の式で表せ。

問3 p_n の一般項を求めよ。また, $\sum_{k=1}^n p_k$ を求めよ。

(解説)

問1 p_1 はサイコロを1回投げて1, 5, 6の目が出る確率だから $p_1 = \frac{3}{6} = \frac{1}{2}$

p_2 は, サイコロを2回投げて

「2回とも1, 5, 6の目が出る」

または

「1回目は2, 3, 4の目が出て, 2回目は1の目が出る」

確率だから $p_2 = \left(\frac{3}{6}\right)^2 + \frac{3}{6} \cdot \frac{1}{6} = \frac{12}{36} = \frac{1}{3}$

問2 p_{n+1} は, サイコロを $(n+1)$ 回投げて

「 n 回目の移動後に点Pが1の位置にあり, $(n+1)$ 回目で1, 5, 6の目が出る」

または

「 n 回目の移動後に点Pが1以外の位置にあり, $(n+1)$ 回目で1の目が出る」

確率だから $p_{n+1} = p_n \cdot \frac{3}{6} + (1 - p_n) \cdot \frac{1}{6}$

すなわち $p_{n+1} = \frac{1}{3}p_n + \frac{1}{6}$

問3 問2の結果の式を変形して $p_{n+1} - \frac{1}{4} = \frac{1}{3}\left(p_n - \frac{1}{4}\right)$

よって数列 $\left\{p_n - \frac{1}{4}\right\}$ は公比 $\frac{1}{3}$, 初項 $p_1 - \frac{1}{4} = \frac{1}{2} - \frac{1}{4} = \frac{1}{4}$ の等比数列だから

$$p_n - \frac{1}{4} = \frac{1}{4} \left(\frac{1}{3}\right)^{n-1}$$

よって $p_n = \frac{1}{4} + \frac{1}{4} \left(\frac{1}{3}\right)^{n-1}$

また $\sum_{k=1}^n p_k = \sum_{k=1}^n \left\{ \frac{1}{4} + \frac{1}{4} \left(\frac{1}{3}\right)^{k-1} \right\}$

$$= \frac{1}{4}n + \frac{1}{4} \cdot \frac{1 - \left(\frac{1}{3}\right)^n}{1 - \frac{1}{3}} = \frac{1}{4}n + \frac{3}{8} \left\{ 1 - \left(\frac{1}{3}\right)^n \right\}$$